

# 明治維新と国学者

—京都一力亭主人杉浦治郎右衛門を例に—

松本久史

はじめに

様々なところで引用され、よく知られていることであるが、和辻哲郎は平田篤胤について、

篤胤の神道説は、宣長の長所である古典の文学的研究と関係なく、宣長の最も弱い点、即ちその狂信的な神話の信仰をうけつぎ、それを狂信的な情熱によつて拡大して行つたものである。それは当時の儒学者からは怪妄浮誕の説と認められて居り、国学者のうちでさへも奇説として斥けられてゐた。しかも篤胤はその狂信的な情熱の力で多くの弟子を獲得し、日本は万国の本である、日本の神話の神が宇宙の主宰神であるといふやうな信仰をひろめて行つた。この篤胤の性行にも、思想内容にも、極めて濃厚に変質者を思はせるものがあるが、変質者であることは狂信を伝播するには反つ

て都合がよかつたのであらう。やがてこの狂信的国粹主義も勤王運動に結びつき、幕府倒壊の一つの力となつたのではあるが、しかしそれは狂信であつたがために、非常に大きい害悪の根として残つたのである。

（和辻哲郎『日本倫理思想史』 下巻 岩波書店 昭和二十七年 六七八―六七九頁）

と、述べており、「狂信的」な平田国学が近代に害悪を及ぼした、という終戦直後の和辻の評価は、現在においても完全に払拭されたとは言ひ難い。しかし一方では、生前からその評価は「毀誉相半」でもあつた篤胤は、近年では『仙境異聞』などの幽冥界の探究の業績が、民俗学や妖怪学の先駆者として積極的に評価されるようになり、新たな篤胤像が形成されつつある。

この間に至る、昭和戦後期の国学研究は、国学者個別の伝記や業績を緻密に研究していく、いわば「紀伝体」的な

業績の蓄積はみられるものの、主流は、和辻のような日本思想史上のイデオロギー分析（批判）であった。<sup>1)</sup>一般的には戦後直後の国学評価が、数十年にわたりそのままの形で持続していったのである。<sup>2)</sup>

本稿は、国学の研究史を概観して、現在あらたな「国像」が形成されつつある研究動向を述べたうえで、そのケーススタディとして、幕末維新时期から明治二十年代にかけての具体例を提示し、より一層の国学研究の深化を促すことが目的である。そのために、従来、著名ではあるが国学者としては認識されていなかった人物、杉浦治郎右衛門の著述・思想を取り上げることとする。

## I 平成における国学研究の概況

### (1) 国学研究の新しい段階

——近代国家の制度面から——

平成に入ると、現代に繋がる国学研究の新たな潮流が生まれてきた。阪本是丸は、

これまで明治維新以降の国学や国学者といえば、もっぱらその「没落」や時代錯誤性、復古・反動制のみが強調され、見るべきほどの成果はないというのが一般であった。だが、筆者はそうした見解に少なからぬ

疑問をかねて抱いていた。というのも、近代天皇制国家が他の近代的立憲国家と際立って異なっている最も重要な特徴は、それが近代国家には稀な「祭政一致国家」として創出され、漸次形成・整備されていったことにあり、そしてその創出・形成は国学者の存在を無視して語ることはできないと筆者は考えているからである」(阪本是丸『明治維新と国学者』大明堂 平成五年序文)。

と、矢野玄道や角田忠行などの平田派国学者が、明治初年の大学・皇学所設置に参画し、国学による教育構想を抱いていたことや、神祇官行政における福羽美静など津和野派国学者の主導力について論じている。また、武田秀章の『維新时期天皇祭祀の研究』(大明堂 平成八年)は、孝明天皇の葬儀や山陵整備からはじまり、「祭政一致」を成り立たせるために不可欠な、明治初年の近代皇室祭祀の成立に国学者が寄与していることを示した。

続いて、明治十年から二十年代までの国学の展開を対象とした研究として、藤田大誠『近代国学の研究』(弘文堂 平成一九年)は、特に明治十五年以降、高等教育・研究機関を中心に展開された学問を、「近代国学」と規定して、木村正辞や小中村清矩など、江戸の実証的国学の流れをくむ国学者に注目し、国学は近世まででその役割を終えたわ

けではないと論じ、明治中期における活動とその意義を明らかにした。齊藤智朗『井上毅と宗教』（弘文堂 平成一八年）は、「明治国家形成のグランドデザイン」とも称される井上毅の大日本帝国憲法制定過程における国学者の影響を論じた。

これらの諸研究は、明治維新から憲法制定にいたる明治前・中期において、国家の骨組みともいえる制度の形成、つまり法制・行政（神社を含む）や学校教育などに、「国学者」の参与が不可欠であったことを明確に示しており、従来の単純な没落説や、近世国学の思想を無媒介に昭和戦前期のイデオロギーと短絡的に結びつけて批判の対象としてきた国学理解に反省を迫ったものと評価できよう。

筆者もこのような研究動向を受け、幕末維新时期における国学を概観し、<sup>③</sup>新たな国学像を模索・提起しようとしている。

## （2）国学研究の新しい段階

——基本史資料の整備から——

平成十年代には、奇しくもほぼ同時期に国学研究の新たな境地を開く事業が開始された。

まずは、平田国学の再検討である。国立歴史民俗博物館館長（当時）の宮地正人を代表とした平田家文書群の調査・

研究（平成一三年）が開始され、史料目録および日記・書簡等の記録文書の翻刻が刊行された。並行して平成一六年一〇月には、国立歴史民俗博物館にて特別展「明治維新と平田国学」が開催され、一般の人々にまで新たな平田国学像が提示された。<sup>④</sup>

宮地の研究に参画した研究者たちの関連する研究書としては、遠藤潤『平田国学と近世社会』（ぺりかん社 平成二〇年）は、近世宗教・神道史の大きな文脈のなかに平田国学を位置付けた。吉田麻子『知の共鳴』（ぺりかん社 平成二四年）は、近年の歴史学界で注目されている「書物の社会史」との関連で、篤胤の著述の出版とその受容形態の分析をおこない、平田国学の受容層への考察を深めた。中川和明『平田国学の史的研究』（名著刊行会 平成二四年）は、地域の平田門人について丹念な調査と分析を行い、平田国学の広範な地域的受容形態を明らかにしている。

一方、国学の始祖と称されながらも、その実態についてあまり論じられてこなかった荷田春満の学問の再検討も始まった。國學院大學の創立百二十周年記念事業の一環として、荷田春満関係資料を蔵する東羽倉家文書の調査・研究（平成一四年）と、『新編 荷田春満全集』（全二巻 おうふう 平成一五～二二年）の編纂・刊行、史料目録等の作成が行われた。この事業に参画した研究者の成果としては、

松本久史『荷田春満の国学と神道史』（平成一七年 弘文堂）は、春満を起点に、宣長以前の国学の展開を分析・考察し、渡邊卓『『日本書紀』受容史研究』（平成二四年 笠間書院）においては、春満の日本書紀神代卷研究を含めた、近世国学と日本書紀の関係を論じた。一戸渉『上田秋成の時代』（平成二四年 べりかん社）では、上田秋成とその周辺の国学者に注目して、春満以来の京阪を中心とした国学の展開を論じている。

これらの新たな成果はいずれも、文献のみならず、その他の史資料（一次資料）にも基づき、総合的・実証的に国学の「実像」に迫るものであり、従来の活字化された全集のテキスト分析にとどまりがちであった篤胤・春満の学問についての理解の再検討を求めるものである。<sup>5)</sup> ようやく、いわゆる「国学の四大人」全てについて、基礎史資料に基づいた実証的研究が可能になったのである。さらに、近年では平田家資料と現地資料の双方を踏まえて、平田国学を幕末維新期の国家レベルの政治史の動向と地域とに結びつけた、宮地正人『歴史の中の『夜明け前』』（吉川弘文館 平成二七年）が刊行され、歴史学界において高く評価されている。幕末維新期研究の中に平田派国学者たちの動向を考慮して行く必要性がますます高まってきているのである。<sup>6)</sup>

新たな国学研究の潮流は、著述の編纂意図やその主張の

分析のみにとどまらず、国学の受容者（読者）層の分析にまで踏み込んでおり、政治・社会的な面での幕末・維新时期における国学者の動向が明らかになりつつある。つまりは、国学を受容した幅広い階層の人々が、国学の思想を背景として、現実社会の中でいったいどのような実践をしたのか明らかになりつつあり、国学研究が点から線、そして面的理解へとダイナミックな進展を見せはじめているといえるだろう。

## II 「国学」の名称と明治時代

昭和戦前期に山田孝雄は国学の目的として次のように述べている。

国学の目的はわが 大日本国を正当に理解することに  
ある。この 大日本国を正当に理解するといふことは  
先ず国家組織の要素から考へると

天皇 国民 国土

の三に分けて観察し、更に之を一括して、

国家 国体

として見なければならぬ。そこでそれらの観察の方面の差によつてそれぞれの学科が必要となるのである。しかし、いづれについても、わが国家といふ意識を忘れては決して国学とはいはれない。（山田孝雄『国学の

傍線・強調は松本、以下同様)

ここには、明治以降に成立した、主権・国民・領土を構成要件とする近代的国民国家を念頭に置いた、「国家の学」としての「国学」という山田の認識をみる。しかし、「国」という語は歴史のもしくは文脈上において、その示す範囲は異なっている(「お国言葉」などの用例からも理解されよう)。たとえば、古代の令が規定する「国学」は、中央の学校である「大学」に対する、地方に設置された学校を指している。時代は下り、近世においても元禄期に成立した山本常朝『葉隠』にみえる「国学」は、具体的には佐賀藩・鍋島家の業績を学ぶことを指している<sup>②</sup>であり、これらの「国」は現在の「地方」という意味で用いられている。

また、山田孝雄を含めた明治から昭和戦前期の研究者たちは、享保期成立の荷田春満『創学校啓』にみえる「国学」に、その呼称と学問としての発端を見るのが定説化していた。しかし、近世のいわゆる「国学の四大人」は、自己の学問について、「古学」・「本教学」等を使用し、「国学」という名称を積極的に用いなかったことも知られている<sup>③</sup>。たとえば、国学の大成者である本居宣長による、

物学とは、皇朝の学問をいふ、そもくむかしより、だゞ学問とのみいへば、漢学のことなる故に、その学

と分むために、皇国の事の学をば、和学或は国学などいふならひなれども、そはいたくわるきいひざま也、みづからの国のことなれば、皇国の学をこそ、だゞ学問とはいひて、漢学をこそ、分けて漢学といふべきことなれ、(本居宣長『うひ山ぶみ』(『本居宣長全集』第一巻 筑摩書房 昭和四三年 七頁))

と、単に「学問」というべきであるという主張に端的に表れている。

さらに、幕末維新时期においても、藩校などでの学科の名称に「皇学」が多く用いられていることを、牟禮仁は論じている<sup>④</sup>。明治十五年に至っても、同年設立された日本古典の教育機関の名称は、帝国大学古典講習科・皇典講究所・神宮皇學館であつて、必ずしも「国学」という名称が優勢であつたとは言い難い。

それでは、なぜ呼称としての「国学」が定着していったのであろうか。その画期の一つとなつたのは、明治二十三年、皇典講究所を母体に設立された「國學院」の存在がある。同年七月の「國學院設立趣意書」には、「茲に國學院を設立して專国史・国文・国法を攻究し、わが国民の国家觀念を湧出する源泉となし」と記されている。藤田大誠の指摘するように、近代国学は近代国家の諸制度形成と密接な関係性をもつて成立していることを考慮すれば、まさに

憲法・議会の成立と「國學院」の設立がほぼ同時期であることは、大きな意味を持ち、「国学」の呼称の定着に寄与したことは疑う余地がないであろう。

他にまた、「国学」を選択せしめた大きな要因としては、平田派国学者たちの学統認識が考えられる。幕末維新期の国学の状況として、本居宣長没後の近世後期（ペリー来航以前まで）の国学は、鈴屋派の時代であったといえる。養子の大平・実子の春庭・孫の内遠は、全国に数多くの門人を擁し、ネットワークを形成していた。それに対し、生前（天保十四年まで）の篤胤の門人は、五〇〇人余にすぎない。門人が急増するのは、慶応年間〜明治四年の間であり、それらはすべて篤胤「没後」門人として扱われているが、その数は千人余りに上る。この幕末・維新时期こそが平田派の時代といっても過言ではない。かれらは、篤胤の『玉櫛』に示されているように、自らに繋がる学統の祖として春満を尊崇しており、平田派自らが版本として流布させた『創学校啓』（気吹舎蔵板では『荷田大人啓文』）に、「国学」と記されていることは、明治二十年代に「国学」の名称を定着させるにあたって、重大な意味を持っていたと考えられるのである。

### III 『国学入門』とその作者

#### (1) 『国学入門』について

明治維新直後の国学に関連する書物の中で、端的に『国学入門』と題された明治二年五月刊行の版本がある。本書は、漢詩体のいわゆる往来物の形態をとり、内容は天地の開闢から桓武天皇に至る皇統を記しつつ、その間の事跡を適記しながら、最後に学問の階梯として、『古事記』・『万葉集』から読み始め、六国史、律令格式を学ぶべきことを解く。その後に『孝経』、『小学』から始め、四書六経などの漢籍を読み、さらに、洋学も皇学の扶翼とすべしと主張し、和魂漢才の大事さを説いて締め括っている。本書の跋文は松菊頑夫、すなわち木戸孝允である。なお、『皇学入門』と題された内容の同一な異本もあり、それには松菊頑夫の跋文はない<sup>10)</sup>。

以前より筆者は、同書を架蔵していたが、若年向けの啓蒙的な小冊子であり、特に目新しい主張が盛り込まれているわけでもなく、特段の注意を払ってこなかった。しかし、あらためて、明治維新と国学者を考えるところ、わがわが木戸が跋文を寄せたのかに注目したところ、非常に興味深い事実

が次第に明らかになってきたのである。

## (2) 書誌と出版について

本書には、近代における「皇学」・「国学」の呼称につき研究した牟禮仁による先行研究があり、書誌学的な考察が加えられ、概要および成立過程についても論じられている〔資料翻刻 皇学入門〕『皇學館大学神道研究所紀要』二一（平成一七年三月）。それによれば、当初は『皇学入門』の題で出版されたが、すぐに『国学入門』と改題、松菊頑夫の跋が付され、出版されたと推測されている。たしかに、『国学入門』本文中には三箇所、「皇学」の語が用いられているが、「国学」の語は見えず、当初の書名が『皇学入門』であったという牟禮の指摘は妥当である。

『国学入門』には見返し・跋文・刊記に多くのバージョンが存在する。牟禮は、A（見返しあり）・B（見返しなし、奥付あり）・C（見返し、奥付なし）三種に大きく区分し、成立の順は、A→Cであろうとする。また蔵板印が「下京式拾四番組」から「須賀廻舎」変化するのは求版（別の第三者が出版の権利を買い取ること）して刊行したのではないかと推測している。なお、明治二年五月の刊行の当初からすでに『国学入門』に改題された理由は不明であるとして、牟禮の指摘の通り、『国学入門』多くの異本があり、

刷りがかなり摩滅した本も見受けられ、少なからぬ部数が印刷・刊行されたのであろう。<sup>①</sup>

## (3) 作者は誰か

それでは、作者は誰なのか、まずは、本文の内容の分析から考察する。一見、本書の神代の叙述は、記紀に依拠しているように見える。しかし、例えば、虚空から造化の三神が現れたという記述は記紀には見えず、これは篤胤の作成した『古史成文』に依拠しているのではと推測される。以下、記紀と記述が異なるいくつか特徴的な箇所を比較してみた。

### ① 造化三神の記述

#### ● 『国学入門』本文

古天地未生 大虚空有神 天御中主神 高皇産霊神

神皇産霊神 為造化之首

● 『古史成文』（『新修平田篤胤全集』第一巻 名著出版 昭和五十二年所収）

古天地未生之時。於天御虚空成坐神之御名。天之御中主神。次高皇産霊神。次神皇産霊神

なお、記紀においては「虚空」から造化三神が生じるといふ記述は見られない。

②「三貴子」出生の記述

・『国学入門』本文

後生日之神 曰天照大神 次生月之神 曰月夜見尊

亦素戔鳴尊

・『古史成文』

因洗給左御目而。所成坐神之御名者。撞賢木嚴之御魂。

天疎向津比売命。亦御名天照大神。復因洗給右御目

而。所成坐神之御名者。月夜見命。亦御名健速須佐之

男命。凡二神矣。

記紀ともに三神が出生し、二神ではない。

③忍穗耳尊の妻の記述

・『国学入門』本文

天照大神子 曰忍穗耳尊 娶玉依姫命 生瓊瓊杵尊

・『古史成文』

此神。御合産巢日神之御女。天万栲幡千幡比売命。亦

名万幡豊秋津師比売命。亦名火之戸幡比売命之兒。玉

依毘売命

記紀ともにオシホミミノミコトが娶ったタゲハタチヂヒ

メの異名を「タマヨリヒメ」とする記述はない

以上のように、神代の箇所における『国学入門』本文の特異と思われる記述は、すべて『古史成文』に依拠してい

ることが明白であり、本書の作者は間違いないく、篤胤の国学を学んでいると理解できるのである。また、学問の階梯についても、古事記、万葉から始めよという点は四大人の流れをくむものであるが、特に儒書の重視、洋学の受容、和魂漢才の主張は篤胤に従ったものであると理解できる。

さて、本書の著者について牟禮仁は、『皇学入門』、すなわち『国学入門』の作者を残念ながら不詳としていたが（牟禮前掲書）、先行研究において、宗政五十緒が、

「神書・歴史類」では、まず有名な岩垣松苗著の『国史略』の再版・中本。日本歴史書として明治初期のベストセラーである。祇園町、万亭主人の杉浦治郎右衛

門著の『国学入門』もみえる。」（宗政五十緒「京都における近代の出版―明治元年から昭和二十年に至る―」京都出版史編纂委員会編『京都出版史 明治元年―昭和二十年』日本出版協会京都支部 一九九一年 一三頁）

と、指摘しているように、杉浦治郎右衛門が著者であると考えられる。すなわち、明治七年刊行の『御維新以来京都新刻書目便覧』には、「国学入門 杉浦治郎右衛門著 全（価）八錢 一」と記されている。

著者である杉浦治郎右衛門とは、竹田出雲『仮名手本忠臣蔵』で大星由良助が遊興したことでも著名な、京都祇園

の茶屋、一力亭の九代目主人である。<sup>12)</sup>

一力亭は幕末維新期には勤王の志士や維新政府の役人たちも多く遊んでおり、大久保利通の側妻の「お勇」、は治郎右衛門の娘である。治郎右衛門の維新後の事績としては、長州藩出身の第二代京都府知事、榎村正直<sup>13)</sup>の京都改革に積極的に協力したことが知られており、近代初の小学校として知られる京都の番組小学校や、芸妓などのための検閲所、女紅場などの設置にかかわり、京都博覧会に合わせて「都をどり」を創設している。教育振興・殖産興業策を通じて「京都の復興を図り、いわば近代、ひいては現代に至る京都祇園町を作った人物ともいえるであろう。<sup>14)</sup>

これらの治郎右衛門の履歴を踏まえれば、なぜ『国学入門』の跋文を木戸孝允が書いたのかは理解できよう。おそらく治郎右衛門は幕末の桂小五郎時代から直接の面識があったと考えられるとともに、木戸の庇護を受けていた植村との関係も相まって、木戸が跋文を執筆したのであろう。

#### (4) 杉浦治郎右衛門の学問(国学)の考察

その著述

管見の限りにおいて、杉浦治郎右衛門は『国学入門』のほかにも、

●『改正暦和解』(明治七年)

版本、一冊、著者「須賀廻舎主人」版元、中西嘉助

●『伊勢両宮参拝案内略記』(明治三年)

活版、一冊、「須賀舎主人」名、版元、中西嘉助

●『太陽暦起原解』(明治三年)

活版、一冊、「杉浦為充」名、版元、中西嘉助

●『神代暦日私考』(明治五年)

活版一冊、「杉浦為充」名、版元、中西嘉助

以上の著述がある。<sup>15)</sup>なお、『国学入門』の異本にも蔵板印のある、「須賀廻舎主人」とは、奥付の住所が同一であることから、杉浦治郎右衛門為充その人であることがわかる。他に、『太陰暦起原解』の著述のあることが『神代暦日私考』に言及されているが、未見である。これらの出版は全て中西嘉助(現存する中西松香堂の創始者)が版元になっている。嘉助は治郎右衛門の義弟であり、両者は深い関係にあった。<sup>16)</sup>

著述には暦書が多いという特徴があるが、伊勢参宮の案内書などは、明治五年に「都をどり」を創設するにあたり、伊勢音頭「亀の子踊り」を伊勢古市に見学、参考にしたとされることも関係している可能性もあろう。<sup>17)</sup>

これらの著述は、いずれも瞥見したところ、『国学入門』同様、平田国学の影響が濃厚である。以下、いくつか実例

を挙げてみよう。

● 内宮祭神 天照大神について

天照皇御大神は。則天原を所治食て。常しへに今も世を天照し給ふ。天津日の大御神に坐しますなり。扱高天原といふは。神典にみえたる如く。天上のことにてあれど。今の詞に高天原といへは。則天ツ日の国を白せり。其天ツ日を。大御神の所治食す御国と定め給へば。其天ツ日は。皇国も異国も只一ツにして隔なければ大御神は皇国のみの大御神にまします。異国までもあまねく照たもふ大御神にまします。天地かぎり四海万国。一日もこの大御神の現御蔭を蒙らでは。えあらぬわざなる物をや。……中略……然れば此伊勢の内宮の御神は。皇国の人は更にもいはず。其余の国々。天地の間万の国々。天ツ日の御蔭を蒙る限りの国々の人は。皆其御徳御蔭を尊ふとみ。拝み奉らではかなはぬ御神にまします。すべての外国には神代の正しき伝説なきが故に。今に至るまで其子細をえしらすして過來ぬるを。皇国には此子細正しく神典に伝はりて明らかなれば。この御徳御蔭を。誰かは仰ぎ尊ふとみ奉らざるべき。〔伊勢両宮参拝案内略記〕一丁ウ（二丁オ）

● 外宮祭神 豊受大神について

そもく皇国は万国の本つ国。祖国にして顕れてこそしられぬ。万の根元は皆皇国より始まれる事にて日神月神の。神代に皇国に生出給ひて。四海万国に御蔭を敷施したまふ如く。此豊受ノ大神の御蔭も同し御事にて。万国の人も命をつぐ。其国々の食穀も。みなこの大神の御霊より生出る物なり。ゆめく此御蔭をおろそかにおもひ奉ることなかれ（同書二丁ウ三丁オ）

このように、日本が万国の祖国であり、優越しているという考え方は本居宣長以降の国学者に見られ、冒頭取り上げた和辻哲郎が指摘した通り、平田篤胤にその傾向が顕著である。伊勢両宮の祭神についての治郎右衛門の説明も、篤胤とほぼ同様に皇国中心主義を主張しているといえよう。しかし、それだけに止まらず、神宮祭神の神徳が外国にも及んでいるのだという考え方は、近世までは禁止されていた僧尼のみならず、外国人にも参拝を許可していた明治以降の趨勢にも合致していることにも留意すべきであろう。

● 曆に関する考え方

凡そ曆ハ日月の行度を測り。五行の情を採て時日を定め。国家百業に。徳を授くる。御政教にして。さらに方位日取等の吉凶を断す可きものにあらず。世の人野

巫の僻説に惑ふこと勿かれ〔改正 曆和解〕凡例

と、曆が「御政教」であり、私のものではないとの立場をとっている。歴史的に、改曆を伴う曆の問題は単に学術・技術面にとどまらず、国家観・世界観を伴ったものであったことに留意する必要があるだろう。<sup>(20)</sup>

・太陽曆の起源について

太陽曆は。皇国に起原すること。平田篤胤大人の。本朝無窮曆。弘仁歴運記考。春秋命歴序考。赤縣太古伝。太昊古歴伝。三曆由来記。太昊古易伝。三輪田元綱大人の地球歴運。十九舎紀法。等の書に参攷してこれを撰す。〔太陽曆起原解〕序文)

太陽曆は決して西欧起源ではなく、皇国に起源があるということを、篤胤だけではなく、篤胤門人の三輪田元綱の曆書も参考にして主張していることが窺われ、興味深い。なお、三輪田は京都等持院のいわゆる足利將軍木像梟首事件の首謀者の一人であり、面識があった可能性もあろう。

・天地開闢以来の年数 以下の通り記述されている〔神代曆日私考』より)

高皇産霊大神

治世 一万八千年

伊佐那岐大神

治世 一万八千年

須佐之男大神

治世 三千三百年

大国主大神

治世 千六百八十七年

瓊瓊杵命

治世 千五百三十一年

火々出見命

治世 五百八十年

鵜草葺不合命

治世 二百八十九年

以上、神代合計四万三千三百八十九年

右の紀年数はおおよそ、篤胤の曆書の紀年と一致している。これらは、近現代の科学的見地からはいかにも荒唐無稽な数字に思えるが、篤胤が『靈能真柱』で展開した天地開闢から太陽、地球、月の成立に至る宇宙観を時間軸から裏付ける意図があり、平田国学の論理においては整合性を有しているのである。まさに治郎右衛門は、篤胤のコスモロジーを忠実に受容し、人々へ発信していったと言えるであらう。

・『天朝無窮曆』との関係性

同書は、篤胤生前には刊行されず、幕末維新时期においても写本で流通していた<sup>(2)</sup>。篤胤の秋田退去処分の原因ともされるが、否定的見解もある<sup>(3)</sup>。治郎右衛門の曆書は右の様に『天朝無窮曆』および他の『弘仁歴運記考』・『春秋命歴序考』など、篤胤の曆書関係の著述を参考にし、ダイジェストしたものであり、日本には天地開闢以来の曆が実存し、この曆を神々が万国に流通させ、現在の太陽曆が成立したという歴史観を示しているが、これは『天朝無窮曆』などの篤胤の曆観を祖述したものである<sup>(4)</sup>。しかし、平田派の中でも、曆書はかなり深く篤胤の著述を読み込んだ者でなければ理解が困難であり、治郎右衛門の理解がかなり進んでいたことを示唆しているのである。

## おわりに

### (1) 国学の裾野を考える

『夜明け前』に見るように、維新後にその思いが遂げられずに挫折した国学者もいたが、実際に国学は、幅広い人々に受容され続け、明治維新から開化期、民権運動をへて、憲法制定・議会開設の明治二十年代までその影響は及んでいったと考えられるのである。杉浦治郎右衛門もその

一人であり、幕末維新时期、明治前期の京都で活躍し続けた人物であった。いわば隠れた平田門人・国学者がどれくらいいたのか、現在のところはわからないが、思いもよらぬ人物が国学に深く影響されていた可能性を探ることは明治近代史を考察する上で必要なことなのではないだろうか<sup>(5)</sup>。

### (2) 『国学入門』の作成意図

当初の書名に「皇学」を用いたことは、同じく京都に設置された「皇学所」との影響関係も推測されるが、木戸孝允の跋文が付された際に『国学入門』に改題された理由は明確ではない。当時、呼称としては「皇学」・「国学」共に交換可能であった状況を示しているだろう。ともあれ、明治二年五月という刊行年、および蔵板印に「学校掛」と記されていることから、直後の番組小学校の設立に密接な関連性があるろう。治郎右衛門は区長として小学校設立(二十四番組小学校、のちに三十三番組小学校)に尽力しており、本書を小学校の教科書として用いることを企図していたと思われる<sup>(6)</sup>、木戸に跋文を求めた意図もそこにあったであろう。しかし、実際の番組小学校の道徳的教導には、儒学・心学が用いられており、明治四年八月の「小学校課業表」に記された各教科の教科書にも『国学入門』の書名は見られず、同書が採用されたと言う形跡はない。なかば公的な教科書

として用いることが断念されたある段階で、「学校掛」から治郎右衛門個人の「須賀廻舎」名の蔵板印に変更され、個人的な著述として位置付け直されたのかも知れない。しかし、全国を見渡すと、筑摩県、豊橋藩などの学校に『国学入門』は教科書として採用されており、治郎右衛門の意図は決して無為ではなかったのである。なお、本書を採用したこれらの地域は平田国学の影響の強い地域でもあり、明治初年の教育史の中で国学を考える際、本書の普及は注目されよう。

### (3) 曆書の制作意図

おそらくは、明治五年十二月の太陽曆への改曆が直接の契機であり、太陽曆が決して西洋由来のものではなく、我が国固有の曆であることを主張したものと考えられよう。ここに、平田篤胤の学問が近代において、必ずしもアカデミックなレベルではないところでも受容されている事例を見る事が出来る。

明治前期における平田国学は、内尊外卑に凝り固まった「狂信的国粹主義」ではない。治郎右衛門の刊行した曆書には、人々にとっては慣れ親しんでいない太陽曆を受容し易くするために、『天朝無窮曆』等の平田派曆書が根拠として用いられているのである。やみくもに近代化・西洋化

を否定せず、柔軟に受け入れていこうという治郎右衛門の姿勢が看取されるのである。さらに注目すべき点は、曆書が改曆からかなり時期が経った頃にも新たに出版されていることである。近世国学の思想的な影響力が、かなり後年まで持続していることは、治郎右衛門個人の資質なのか、一般性を持つのか否かは今後の課題である。

### (4) 今後の展望と課題

杉浦治郎右衛門は、明治天皇東幸にともなう京都の衰退に抗して、横村正直と協力し、殖産興業・教育振興策を推進した。現在の、いわゆる「祇園」の町を形成したのも彼の尽力が不可欠であり、海外の人々にも、京都らしさ、さらには、日本らしさまでもアピールしているのである。その事績からは、維新という変革と京都の伝統とを調和させた人物であったといえるだろう。

『国学入門』を端緒に、彼の著述を繕くことにより、国学を学んでいたことが明らかとなった。「気吹舎門人帳」にも記載されず、篤胤の正式な門人ではないが、その思想的なバックボーンは間違いなく平田国学であり、しかも、時流に乗った俄か学問ではなく、深く篤胤の学問を理解していたことも著述の内容から明らかである。

四千数百名の平田門人の背後には、さらに数多くの隠れ

た受容者が存在し、広く活動していったはずである。それらの人々を発掘し、社会的活動の動機や思想との関連性を解明することが今後とも重要であろう。宮地正人が紹介した東濃・南信の平田派の人々が生きた幕末・維新时期の姿の分析をはじめとし、本稿はささやかな試みであるが、国学が近代日本に与えた社会的影響力の実態が、今後ますます明らかにになり、ゆたかなものになっていくことを期待したい。

## 註

(1) 和辻の篤胤批判は、その直前の満州事変以降の「国学熱」ともいえる国学への注目の大きさが反映していると考えられる。昭和戦後期の国学研究の概観は、桂島宣弘「幕末国学の再検討のために——「比考」としての言説構造の転回をめぐる——」（『立命館大学人文科学研究所紀要』五九 一九九三年一〇月）も参照。

(2) 筆者は拙著で國學院大學日本文化研究所の国学研究を中心に、昭和戦後期の国学研究を概観したことがある（松本久史「國學院大學日本文化研究所における国学研究の歩み」『荷田春満の国学と神道史』弘文堂 平成一七年所収 参照）。また拙著序論においても戦後国学研究史の概観を試みている。

(3) 維新时期には、維新政府の基本的国家方針としての「神武創業」という概念を大國隆正門下の国学者、玉松操が構想し、復興された神祇官において、神仏判然（分離）令

をはじめ、国家的祭祀制度の確立を志向した際にも、福羽美静などの国学者が参画している。さらには明治三年（一八七〇）から開始された大教宣布運動には国学者が数多く参加し、平田篤胤以来の幽冥思想に依拠して国民教化活動にあたった。また、幕末期から各地で国学を教授する藩校が増え、維新政府の大学構想では国学が主要な地位を占め、明治二年には京都に皇学所、東京に大学が設置されるにいたったが、漢学者との対立が先鋭化する中、結局政府は洋学を採用することになり、構想は頓挫した。また、大教宣布運動も神道界の意見の分裂を原因に明治十五年（一八八二）、神官と教導職が分離することによって終息したが、明治期を通じて教派神道の教師や神社の神職として活動した国学者も数多い。明治十年代以降の国学は「国家有用の学問」としての意味合いが強くなり、国学者は法制・行政に関する古代の事跡の考証をすすめ、憲法制定にかかる資料の提供や、行政および皇室制度、神社などの国家制度の形成に寄与した。（宮地正人他編『明治時代史大辞典』吉川弘文館 平成二三年の松本久史執筆「国学」の項より）

成果として、宮地正人編『平田国学の再検討』（一）（四）『国立歴史民俗博物館研究報告』一二二（平成一七年三月）・一二八（平成一八年三月）・一四六（平成二一年三月）・一五九集（平成二二年三月）がある。

(5) 近年では、小林威朗『平田篤胤の靈魂観』（平成二八年弘文堂）のように、篤胤の思想の内在的な理解を追求するため、全集本ではなく草稿本からテキストの成立と思想の変化を追っている研究もあらわれている。

(6) 平成二十年代後半以降の幕末維新期の平田派研究は、宮地正人らの研究成果を踏まえ、三ツ松誠、天野真志、小田真裕などの歴史研究者によって、緻密な研究が展開している。

(7) 御家来としては、『国学心懸くべき事なり』。今時、国学目落に相成候。大意は、御家の根元を落ち著け、御先祖様方の御苦労・御慈悲を以て、御長久の事を、本付け申す為に候。(中略) 釈迦も孔子も、楠も、信玄も、終に龍造寺・鍋島に被官懸けられ候儀、これ無く候へば、当家の風儀に叶ひ申さざる事に候。(中略) 国学得心の上にては、余の道も慰みに承るべき事に候。能々了簡仕り候へば、国学にて不足の事、一事もこれ無く候。(『葉隠』聞書一 冒頭部 日本思想大系二六『三河物語 葉隠』岩波書店 一九七四年 二一六頁 ※本文の一部、松本が書き下し)

(8) 大正期に河野省三により『創学校啓』の草稿本が紹介され、そこには「国学」ではなく「倭学」と記されていることが明らかとなり、実際には春満は「国学」の名称を用いていない(河野省三『国学史の研究』昭和十八年 畝傍書房 一五二―一五四頁)。

(9) 牟禮仁「皇学四大人から国学四大人へ」『皇学館大学神道研究所紀要』一九 平成一五年三月。

(10) 『国学入門』は、石川松太郎監修『往来物大系』第五〇卷(平成五年 大空社)に影印版が所収され、同書の注記には「神代より桓武天皇の平安遷都に至るまでの歴史を、神道の立場から説き、最後に国学入門の手引きを記した往来。国学に入る際には、和学はもとより、漢学・

洋学の書籍についても学習することを推奨しているのも特色の一つである。5字1句、2句1行を基本とし、全452句からなる」とある。

また、『皇学入門』については、往来物の研究家である小泉吉永のホームページ「往来物倶楽部」の同書解題に、「皇学入門【作者】 杉浦挂作。【年代】 明治二年(一八六九)刊。【京都】 著屋嘉助(中西嘉助・松香堂)ほか板。【分類】 教訓科。【概要】 大本一冊。五字一句の『実語教・童子教』形式で、「入学ノ幼童ニ皇道ノ大意ヲ教」えた教訓書。「上世神皇道、万機先神事、自余政為後、以武建国基……」から始まり、「……今為人門童、書皇学一端、日々勤習読、必勿敢妄失」と結ぶ五言四二句の文章で、神代から平安朝までの皇国史や、皇学入門者が学ぶべき典籍(『古事記』『万葉集』『六国史』等)や学問の順序(皇学・漢学・洋学)を説き、「イロハ」によらず「五十音」を学ぶべきとする学習心得にも言及する。本文を楷書・大字・六行・付訓で記す。見返しに「下京二十拾四番組学校挂杉浦著蔵」と記す。また、裏表紙見返しに「皇学入門詳解、追刻」と案内するが、出版の事実については未詳。」(小泉吉永「往来物倶楽部」[http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a\\_r/Bkahrtn](http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a_r/Bkahrtn))とある。

(11) 牟禮は『国学入門』を六種(A1~3、B、C1~2)に細分しているが(『資料翻刻 皇学入門』一五一頁)、さらに書誌的考察の必要性もある。A類に区分される拙蔵本(仮に甲とする)では「下京二十三番組」の蔵板印が見返しにあり、牟禮の分類では、A2とA3の間に位置するものと思われる。また別の拙蔵本(乙とする)は、

(12)

A3とはほぼ同様であるが、匡郭上部の「官許」の文字のない見返しを有し、跋文・奥付がない。牟禮の分類に従えばA3の次、B・C以前に位置付けられるはずだが、Aより成立が下るB・Cともに跋文があり、跋文のない乙はC以降の成立とも考えられ、確証を得ない。

『日本人名大辞典』（講談社）では「杉浦治郎右衛門（すぎうらーじろうえもん）1820-1895 明治時代の実業家。文政3年9月28日生まれ。京都祇園の茶屋一力（いちりき）の主人。榎村正直の助けをえて、明治3年日本最初の検徴治療所、6年婦女職工引立会社（女子教育機関、のちの遊所女紅場（によこうば））を設立し、祇園の復興につくした。5年第一回京都博覧会では「都をどり」の催しの創設に協力した。明治28年2月24日死去。76歳。山城（京都府）出身。本名は為充」とあり、『京都大事典』（淡交社 昭和五九年 五三二頁）には、「祇園一力の九代目主人。明治維新以後、京都府知事榎村正直の協力を得て、衰退した祇園の復興に尽力。明治三年全国にさがけて検徴治療所を祇園社神幸道の南側に建て、同六年婦女職工引立会社（のちの遊所女紅場）を設立、花街の婦女の職業教育機関を作った。また都をどりの創設にもつくした。隠居して治郎左衛門と称した」と記述されている。

(13)

榎村正直（まきむらまさなお）一八三四-一九六 幕末・維新期の長州藩藩士、明治時代前期の官僚政治家。安之進・半九郎などと称し、正直は諱。天保五年（一八三四）五月二十三日長州藩士羽仁正純の次男として生まれ、十六歳で榎村満久の養子となった。幼時、剣・砲術を学ん

(14)

だのち相州警衛にあたったこともある。同藩の諸役をとめて、文久三年（一八六三）、当職所筆者役となり、翌年には密用方間次役に就任。その年おこった蛤御門（禁門）の変の前夜、一時上京したが、のち、帰藩して、家督を相続。また慶応二年（一八六六）の幕長戦争では大島口へ出動。王政復古後、新政府の徴士などから権大参事、ついで明治八年（一八七五）京都府権知事から十年に府知事に昇進。この間、京都の御用商人小野善助らの東京転籍希望をめぐり、それを認めなかつたため、司法省により、府知事のまま、短期間であったが拘留されたこともあった。しかし、四年間の府知事時代、京都の教育と産業の振興につとめ、のち元老院議員、行政裁判所長官も歴任した。二十年男爵。二十三年貴族院議員。二十九年四月二十一日没。六十三歳。墓は、東京都港区の青山墓地にある。（『国史大事典』吉川弘文館の記述）

番組小学校設立に治郎右衛門が貢献したことは、「然ルニ当学区ハ従来遊郭ノ地ニシテ興学甚ダ困難ナリシモ、其時ノ町年寄タル故杉浦治郎右衛門氏ノ幹旋甚ダ力メタリシト、時ノ府知事榎村正直氏為メニ出張シテ府令ノ主旨ヲ説キ、興学ノ思想ヲ喚起シ他区ニ率先シセムバ、本区ノ風ヲ望ミテ他区ハ弁ヲ要スルニ及バズト百万懇諭措カザリシヲ以テ杉浦治郎右衛門氏、其旨ヲ奉ジ百難ヲ排シ、明治二年七月、現今校舍玄関敷地ニアリシ旧町会所ニ修繕ヲ加ヘ、其月ノ二十二日開校ノ式ヲ挙グルニ至レリ。」（『京都市弥栄尋常小学校沿革史』（弥栄中学校所蔵文書）京都市『史料 京都の歴史』第一〇巻 東山区平凡社 昭和六二年 一九七頁）との記述がある。

また、祇園町の整備については「明治二十年の数字によれば、祇園新地および膳所裏の一年間の収益は、十八万円近くになり、他を大きく引き離している。ちなみに鳥原はわずかに四千元で、凋落著しい。

当時、祇園の活況のかけには、万亭主人杉浦次郎右衛門の存在が大きく働いていたものと思われる。彼は政界人・財界人とも親しく、明治期の公共事業や大々的な祭典行事などには、祇園町を率いて常に協力的姿勢を示しているのである。(『京都市『京都の歴史』8 古都の近代昭和五〇年 学藝書林 二九四頁)との評価がみられる。禁門の変で遭難した桂小五郎を芸妓幾松(後の木戸夫人の松子)が助けたというエピソードは広く知られている。一力亭も薩長志士の会合の場であり、両者は以前から直接の面識があると考えるのが自然であろう。

(16) 現在、これらは。「国立国会図書館デジタルコレクション」<http://dl.ndl.go.jp/>と閲覧可能である。

(17) 『出版文化の源流 京都書肆変遷史』(京都府書店商業組合 一九九四年 三九四頁)参照。

(18) 明田鉄男『維新 京都を救った剛腕知事』(小学館 平成一六年 一六五頁)参照。

(19) 『伊勢両宮参拝案内略記』の奥付には、施本所(発行元)として、下京区寺町通四條南の「神宮京都本部」が記されている。詳細は不明であるが、神宮の崇敬・参宮を勧奨する組織であったと考えられ、治郎衛門が中心的な人物であったことが推定される。

(20) 近世の貞享改暦に当たっては、垂加神道家としても知られる洪川春海が主導している。

(21) 『天朝無窮暦』の書写費用は、全七巻で三両とされており(『平田篤胤著作書写価格表』「平田国学の再検討

(二)「国立歴史民俗博物館研究報告」一二二 一七五頁、広く流通した書ではない。

(22) 吉田麻子は、平田家の日記等の記述から、秋田追放の要因となった書物を『大扶桑国考』ではないかと推測している(『知の共鳴』一二七〜一三五頁 第三章第四節「篤胤の江戸退去と書物」)。

(23) 天朝無窮暦とは。掛まくも阿夜に畏き。我が天皇命の皇祖。伊邪那岐大神の。天地万の道を創め給ひし当昔より。神ながら世に授けおき給へる真暦を。後に大國主神。殊に宜しく調し給ひて。大御国に遺し給ひ。然て赤縣州の戎を始め。諸蕃の国々へも。布及ぼし賜へりし本暦の。固より有来れる随に。筑紫の日向の。高千穂宮に御坐して。天下しろし看せる。天津日高彦火瓊々杵尊の大御代より。其天朝に用ひ給ひて。日本書紀の紀年。日次月次に載させ給へる暦を謂ふ。(『天朝無窮暦』序文「新修平田篤胤全集」第十三巻 名著出版 昭和五二年 一〇一頁)

(24) たとえば、足尾鉾毒事件で著名な田中正造も篤胤没後門人であった。宮地正人『幕末維新変革史』下巻(岩波書店 二〇一二年)の第四十九章「田中正造と幕末維新」には、幕末維新期の正造の思想と実践が叙述されている。皇学所に関わった平田派国学者、矢野玄道旧蔵の書物が蔵される大洲市立図書館矢野玄道文庫に、「皇学入門」が所蔵されている。

(26) 他にも、歴代天皇の事績が桓武天皇の平安京遷都で終わっていることは、天皇東幸に対する治郎右衛門の思い

が込められていることも考えられる。『国学入門』では「延暦十三年 宮遷山背国 詔改作山城 号称平安京 告伊勢神宮 永定不遷都」と記されている。

(27) 京都府教育会編刊『京都府教育史』上 昭和十五年 二八二頁。

(28) 明治五年九月の「筑摩県学校課業表」の第三級(学年)の「読書」の科目に「国学入門」が見える(長野県教育史刊行会編刊『長野県教育史』第七卷 史料編一 昭和四七年 六六七頁)、稲垣忠彦「郷学校の普及と学習内容」『帝京大学文学部紀要 教育学』一一二三 二〇〇三年)も参照。

(29) 明治三年八月に開校された豊橋藩の「皇学校」の「豊橋藩皇学校開校次第」に、用いられる教科書として「国学入門」が見える。(岸野俊彦「史料紹介 豊橋藩『時習館文庫目録』・尾張藩『明倫堂献納書』」(名古屋芸術大学研究紀要)三七 二〇一七年)。

(30) 筑摩県に属した南信の伊那郡は幕末維新时期平田派の一大拠点であり、豊橋藩には京都皇学所にも出仕した門人の神職、羽田野敬雄がいる。

(國學院大學教授)